

洲

〔倭名類聚抄一岸〕洲 爾雅云、水中可居者曰洲、李巡曰、四方皆有水也、音州、須名。

〔箋注倭名類聚抄水土〕所引釋地文說文作州、云水周遠其旁、从重川者堯遇洪水民居水中高土故曰九州、是州本洲渚字、轉注爲九州、故州渚字、俗從水以別之也、釋名洲聚也、人及鳥獸所聚息之處也、廣雅州居也、契冲曰、須與栖巢同語、謂人所居住之處、愚謂須清冷之義、洲必單砂、無汙泥、故名須、〔東雅二地輿〕洲シマ 古語にシマといひしは、スミの轉語なり、水中可居之所なればスミといふ、その語轉じてシマといふなり、八洲知之といふ事を、八隅知之ともいふこれ也と、萬葉集抄に釋せし誠に然なり、舊事紀には洲字讀てシマと云ひしを、古事記には島の字に改めしるせし事は、太古の時には、沙をよびてスといひけり、スヒチ子の神、沙土根としるされしが如き此義なり、後に沙洲の義によりて、洲の字をば、其字の音のまゝにスと讀み、洲の字の古音は、シマといふには島の字を用ひ、沙をばまたスナゴなど讀しが故なり。

〔倭訓栢前編十一〕す○中 洲をよむは亥う反音也、其證古事記に見えたる、渚をよむは洲より出たり。

〔藻鹽草水邊〕洲 同名所

おきつ洲 しら洲 なが洲 あきつ洲 かは洲 いる洲 濱洲 洲さき ひししのかげり、
ひし里など云も、河海等の中にあるさて云々、いちの洲 みなと洲 する洲 洲はま洲 濱一説也、長洲 摺州 河邊人しれすおつる涙はつのは國のながすとみへて袖ぞくちねるあしたづ、

〔更科日記〕濱名の橋につきけり、略中とのうみはいといみじくあらく、波たかくて、入江のいたづらなるすどもに、こと物もなく、松原のしげれる中より、浪のよせかへるも、いろ／＼の玉のやうにみえ、まことに松の末より波はこゆるやうにみえて、いみしくおもしろし、